

# 真実の人生を求めるのは今しかない

人身受けがたし、今すでに受く。仏法聞きがたし、今すでに聞く。

この身今生にむかつて度せずんば、さらにいづれの生にむかつてかこの身を度せん。大衆もるとともに、至心に三室に帰依したてまつるべし。

みずから仏に帰依したてまつる。

まさに願わくは衆生とともに、大道を体解して、無上意をおこさん。

みずから法に帰依したてまつる。

まさに願わくは衆生とともに、ふかく経蔵に入りて、智慧海の「ごとく

ならん。

みずから僧に帰依したてまつる。

まさに願わくは衆生とともに、大衆を統理して、一切無碍ならん。

無上甚深微妙の法は、百千万劫にもあい遇うことかたし。われ今見

聞し受持することをえたり。願わくは如来の真実義を解したてまつらん。



この言葉は『日常勤行聖典』の最初に記載されている礼讃文(三帰依文)です。人間に生まれることはとても難しいことであり、仏法に出遇うことは、もつと難しいことであると皆さんは意識したことはありませんか？私たちがもうすでに人間に生まれ、さらにお念仏のご縁にも遇っていることを、何の感動もなく、当たり前のように思つて生活しています。

人間に生まれることの難しさを本当に喜ぶことが出来るようになるには、お聴聞しお念仏の教えに遇うことではじめて気づかされるのです。お念仏の教えに遇うことができなければ、人間に生まれることは、喜びではなく苦しみの多い「一切皆苦」と説かれているように、ただ辛く苦しいだけの人生で終わっていたかもしれません。

人間として生まれることがとても難しいことの例えとして、『雑阿含経』の中に「盲亀浮木」のたとえとして説かれています。ある時、お釈迦さまがお弟子の阿難尊者に尋ねられました。「大海原の底に一匹の目の見えない亀が住んでいて100年に1度だけ浮かび上つて海面に顔を出すとしよう。その大海原には1本の流木が漂つていて、その流木の真ん中には1つの穴がある。この亀が海面に浮び上がったとき、ちょうどこの流木の真ん中にある穴から頭を出すようなことがあるだろうか」と。阿難尊者は「大海原においてそんなことはほとんど考えられません」と答えました。するとお釈迦さまは「誰もがそんなことはあり得ないと思うであろう。しかし、絶対に全くないとは言ひ切れぬ。人間に生まれるということは、今の例えよりも更にありえぬほど難しいことなのだ」と説かれました。それほど稀な人間として生まれる尊いご縁を今我々はいただいているのだと説かれました。

すでに人間として生まれさらに仏法聴聞しているとても有難いご縁をいただいて生かされている私であるのに、本当にそのことを有難く思っているでしょうか。限りある人生、人間として生まれることができ、さらに「南無阿弥陀仏」に出遇えた喜びを味わいながら浄土への人生を歩ませていただきますように！